

開創天文三年（一五三四）、宗派は日蓮宗（総本山は身延山久遠寺）である。
京都・大本山妙顕寺第八世日広聖人の弟子である、五千院日舜聖人（永禄一〇年（一五六七）五月一日寂）の開山で天文三年四月住とある。

当初、厚見郡今泉村（現・岐阜市柳町の辺り）に創建、慶長五年（一六〇〇）に岐阜中納言織田秀信公より現在地を寄進され移転した。此処は旧竹中半兵衛屋敷跡で、当時既に空き屋敷であったものと推量される。

〔注1〕 慶長五年六月二八日付の織田秀信公の寄進状及び添状が「妙照寺文書」として岐阜県史資料編にあり。

境内奥の「三光稲荷社」は、竹中家が守護神として屋敷内に祀り信仰したと伝えられている。人々は妙照寺を「さんこうさん」と呼び親しみ、「三光稲荷社」への参詣者も多い。当寺の山号も「三光山」である。

移転以後、本堂・庫裏・鐘楼等順次に代々の住職の努力によって現在の形を成したのは、恐らく天保年間頃と思われる。

又、芭蕉滞在の寺としても知られており、これらについては別記しております。

〔参考〕 織田秀信公の竹中屋敷を寺に寄進した書状が、妙照寺文書として岐阜城資料館に常設されています。

◎ 後記

『しるべして 見せばやみのの 田植え歌』（己白）の句を芭蕉に贈り、これに対して、

『笠あらためん 不破のさみだれ』と芭蕉が脇をつけている。

己白（日賢上人）が芭蕉と連れ立って岐阜への途中不破の関辺りで詠んだ句であるという。

約三百年前に芭蕉が滞在したという「芭蕉の間」も最近では徐々に知って頂き見学の方も増えて参りました。皆様のご協力のもと、私たちはこれからも末永くこの貴重な建物を保存して参らなければなりません。

平成二十二年より約三年をかけて「平成大改修」を行い、本堂及び庫裡の屋根を瓦から銅板に葺替え、建立当時にはこけら葺きであった趣を復元致しました。また屋根を軽量化することにもなり、耐震の面でもより安定・安全を確保できたものと思えます。

長い歲月の間に天災・戦災・社会変動・都市の行政などの条件によって寺院も形を変え昔の原型を留めているものは都市部においては皆無と言っても過言ではないと思えます。幸い当寺は時代をくぐり抜け創建当時の原型をほぼ留めており、都市部における貴重な存在であると思えます。〔但、鐘楼移転・庫裏の改築等があり。境内地の形態及び諸堂の配置はそのまま〕

平成二十九年二月

住職 堀 智 仙（三〇世） 敬白

當山の概略

三光山 妙照寺

〒五〇〇・八〇一七 岐阜県岐阜市梶川町一四番地

電話（〇五八）二六四・七七九三

●岐阜市重要文化財の指定（二件）

平成九年七月三十一日に岐阜市重要文化財に指定されました

① 本堂

建立年代が不明でしたが、古文書等の資料によつて、寛文二年（一六六二）であることが分かった。初めの形は、向拝（こはい）が無く屋根も柿（こけら）葺きであった。瓦への葺替は享保四年の記録がある。

※平成大改修にて下ろされた東西の鬼瓦にその年号と作者の名が書かれており本堂前に展示されています

② 庫裏

現存する県内の神社・仏閣の中で最古の建造物であると、県教育委員会の調査の結果が報告されている。

〔岐阜県文化財調査報告書・岐阜県の近世社寺建築（昭和五五年度）〕



「芭蕉の間」

又、芭蕉が当寺に滞在した十二畳の座敷は「芭蕉の間」と呼ばれ、研究者・俳句関係の人々から「芭蕉が直に触れた建物は現存するものが少なく貴重なもの」と評価されている。

●妙照寺と芭蕉との関係

芭蕉がこの寺を訪れたのは、貞享五年（一六八八）六月八日である。（九月に元禄と改元）

當山第七世泰禪院日賢上人は、号を「己白」といい、別に「秋芳軒」「宜白」とも称した。

芭蕉とは俳諧を通じて親交が深く、その縁で一ヶ月間滞在した。

その間、当地の有力者や俳諧・風流人に招かれて数多くの名句を残している。

《注2》先述の第七世はここでは「後の・・・」と表現するのが正しいと思う。それは古文書の資料により、貞享五年当時は第五世円光院日応大徳（中興の開山）の時代であった。

日賢上人は元禄六（一一年）（十一月一日寂）の住職であり、芭蕉は元禄七年の没である。

芭蕉 元禄七年一〇月一二日 五一才没

日賢 元禄一一年一月一日 五五才没
同年齢であったことが分かる。

境内の句碑にある、

『やどりせむ あかぎの杖に なる日まで』

の句は、到着の時に詠んだ挨拶の句である。

昭和五一年秋、岐阜県俳句作家協会が建立したもので、字は俳人加藤楸邨先生の筆である。また、碑の後ろにある老梅は芭蕉の手植えの梅と言ひ伝えられている。

●尾張公との関係

尾張の殿様が岐阜城登山の時、当寺が御休憩処と定められ、記録によると数十度に及び、その時の様子が詳しく記録されていて興味深い。

●杜若（かきつばた）の池（※猪被害にて荒廢中）

戦後荒廢していたのを、平成五年に発掘復元したものである。石組み等の原型は不明の為、池を生かすべく造りなおしたものであるが、一部昔の石垣が出現した。

芭蕉滞在の頃すでに「杜若の池」として知られていたよううで、各務支考（一六六五〜一七三二）の

『投げわたす ころの橋や かきつばた』

見龍（支考の別号）

の句の前置きに、『新屋敷なる沢の杜若を見んと東羽右範を伴いて』とあることから分かる。

（この辺りを「新屋敷」と言い、東羽と右範の二人の弟子を連れて、の意）

明治の中期には、当時の住職日顯上人（二五世）が初代県知事小崎準（我々亭と称す）等の風流人を集め詩歌の会を催した。その頃には「不共庵―ふきょうあん」という庵が池の傍らにあり、芭蕉の間にある「不共庵」の額は我々亭の筆である。

「杜若の池」

